六までのせてゐる。これは現今の書目と對比して見ると面白い。

編者の親切は單式印刷のみならず、解說、誤字一覽表に示されてゐる。一覽表により、本文の誤字、脫字、當字の訂正が出來、解說により本書目以外の傍系的書目の出版を知り得る。面白き事は、嘉永安政の頃出版された寫本唱導集品目なる寫本目錄に「若し御手元にて御寫し取被下候はゞ一卷に付見料貳匁づゝと相定め」云々といふ奇拔なるものあるを知り、更に興味を此の方面に向けられるであらう。

本書は三百部の限定版で、書史學上重要なる位置を持つものであるとはいへ、非營利的な出版といはねばならぬであらう。此の點、此の業蹟を遂げられたる編者に棒げる感謝と共に東林書房店主にも同樣感謝の辭を捧げる。（菊版本文四七八頁、價五・〇〇、京都市烏丸通二條、東林書房）〔寺尾〕

●紫香樂宮趾の研究　滋賀縣保勝會

著者肥後和男學士は前に大津宮趾の研究に際して遺趾の發掘と同時に文獻的考察を試み兩方面から結論を導き出さうと努めて調査方法に獨自の境地を拓かれた。本書にもその態度が鮮明に現れてゐる。

內容は遺趾の調査報告—一、信樂谷と內裏野、二、調査の經過、三、遺跡と遺物及び、四、文獻による研究と、五、結論より成る。前者に就いて斯かる大發掘を成功的に成し遂た裏にひそむ辛苦に敬意を表したい。文獻的研究は續紀、正倉院文書等の斷片を繼ぎ合せて宮寺の外觀變遷を攷究しそれによつて遺趾の性質を明らかにしようとする非常なる努力の偲ばれる一文である。遺趾の發掘はかく文獻の採集をまつて全きものとされるのであらう。其上に立つて文化史的方法を試みる著者の意圖の發展を祈り古代史上の重點である、紫香樂宮について貴重なる報告の出でしを篤志者に紹介する。（四六倍版、本文九九頁、圖版二一葉、定價一・二〇、滋賀縣保勝會發行）〔藤〕

日本文代叢考　京城帝國大學法文學會編

昭和三年以來續々論纂を刊行し學界に稗益するところあつた京城帝國大學法文學會は、今又、文學・史學に關する論文五篇を集錄し種々の視角から日本文化を批判してゐる。

麻生磯次氏の「支那文學の馬琴の作品に及ぼせる影響」は、椿說弓張月と水滸後傳、三七全傳南柯夢と三國志演義と云ふ風に、馬琴の代表的作品九篇と支那文學とを精緻に比較研究し、馬琴が着想や趣向の範を支那文學に求めながら、而も單なる飜案に墮することなく、これ等をよく自家藥籠中のものとしてそれに自在な趣向を加へた點を指摘し、江戸時代に於て讀本が如何にして成立したか、或は外來文化の影響はどうであつたかを論じ、廣く和漢の小說に涉り之を集成しやうとした馬琴の我文學史上に於ける地位を併せ考へるを意圖してゐる。

時枝誠記氏は「古典註釋に現はれた語學的方法」と題し主として仙覺抄を論じ、仙覺にあつては言語の新古に就いての歷史的な考なく、言語の單位に對する意識も亦朧氣で音が言葉を構成すると云ふ意識が强く働いて居り、その語學的方法の缺點の多くこれに起因するを說き、次にこれ等の缺點あるにも拘はらず同抄には古典註釋に當つて重要な古代を理解せんとする心の働が認められ、語學的方法に於ても少なからぬ卓見あることを詳細に例證してゐる。この間古典註釋の國語研究と、一般國語研究とを區別し、古典註釋の方法が言語に對する考へ方卽ち言語意識に如何に多く左右せられるか等を問題としてゐる。けだし國語研究の方法論に關して示唆に富む力作と云ふべきであらう。

藤田亮策氏の「朝鮮及び內地發見の耳飾に就いて」は、內地と朝鮮に於ける三世紀及び八世紀頃の墳墓から發見される耳飾の確例を列擧比較研究して其形態の變化や裝飾法を詳述し、此物が朝鮮に培はれ、やがて日本の島々に渡り、採鑛に治金に、鑄造・合金・鍍金にあらゆる方面に發達した徑路を注意し、更に北方民族の文化とこれ等との關係にも及んだもので、東洋に於ける古代文化系統を論ずる上によき參考資料を提示してゐる。

高木市之助の「山家鳥虫歌と近世民謠の一面」も又文學

史研究に新しみを加へた點に多大の興味あるもので、先づ從來紹介飜刻された山家鳥虫歌に比較して氏所有に係る明和刊本の優れたものであることを云ひ、その成立、性質、他の歌謠集と比較して觀た得失等を論じ、更に同書に載せられた牧歌を通じて、民謠の最も根本的な屬性の一つ、卽ち動き—傳波に關して力說することころがある。民衆の眼はむしろ常に內容よりも技巧に、內面よりも表面に注がれたと云ふ常識的な見解を再吟味して、學問的な必然に高めんとする氏の努力を窺ふべきであらう。

田中豐藏氏の「佛師定朝」は、定朝の傳記を整理し、作品を吟味穿鑿して、現存する唯一の彼の作品が鳳凰堂の阿彌陀如來なることを考證し、これと同堂扉壁の諸圖等との關係を考察し、鳳凰堂こそが當時の宗教觀念の最もよき藝術的具現であると斷ずる。未完の本稿が「定朝式の完成」「定朝の摸倣者」にもとき及ぼして更に其意を盡し、以て本邦造像史研究に資するところ多からんことを望む。菊版四七〇頁、定價三・〇〇、東京、刀江書院

〔吉田〕

彙報

●史學研究會大會

第一日は十一月二十一日午後一時より京都帝國大學樂友會館大講演場に於て開催、左の三氏の講演あり、引續き例年の如く評議員の改選を行ひ、新たに藤田元春・小牧實繁兩氏が加へられた。

ビスマルクの外交に及ぼせるプロシヤ後宮の影響

文學士　時野谷常三郎氏

プロシヤ國王ウイリヤム一世は、ビスマルクの獨逸國家の統一と云ふ理想に同意してゐたのであるがその後宮と姻戚關係にある墺・露・英三國が巧みに後宮をあやつゝた爲、王の理想實現の決意はにぶらされた。云々。

日本文化の東北進展について

文學博士　喜田貞吉氏

我那の石器時代が何時迄下るものであるかの疑を解決しやうと數年來東北地方の古代文化を研究してゐたところ、大和民族の文化卽ち所謂日本文化は逐時東北地方に擴がり、やがて全體を覆ふたのでなく、寧ろ飛び〳〵に各地に及び、其地を中心に附近に傳へられたものであることが知られる。從つて山間避地には今も尙アイヌの文化が殘存してゐる。云々。